

# ジャパン・オープンの歴史

## 草創期・苦境・興隆

現在の楽天ジャパン・オープンの興隆までには、世界に後れを取った誕生からスポンサー難など、幾多の苦境を乗り越えた歴史がある。

1960年代、プロの試合は「興行」と位置づけられていた。しかし、62年に年間グランドスラムを達成したロッド・レーバー（豪州）らが、プロの世界に飛び込み、興行の方が人気を得る。米英など有力国の要望を受け、国際庭球連盟（ILTF、現国際テニス連盟）はついに68年3月オープン化を承認。問題は大会のオープン化と同時に選手の資格にあった。アマチュア選手ならプロの参加する興行に出場したら資格を奪われる。そのためILTFはアマとプロの間に「オーソライズドプレイヤー（認定選手）」というカテゴリーを設け、デ杯参加など各国協会の意向に従う代わりに賞金の受け取り可能な、いわば「セミプロ」選手を認めた。世界の勢はオープン大会に傾いた。一方、世界のトーナメントをつなぐ鎖としてツアーが構成される。コマーシャル・ユニオンという英国の保険会社をスポンサーとする「グランプリ」である。

この流れに取り残されたのが日本だ。日本庭球協会（現日本テニス協会）は日本体育協会の傘下競技団体であり、日本体協には厳然たるアマチュア規定があった。68年のILTF総会で、日本協会はオープン化反対の立場を取ろうとした。世界の流れを読めずにいたのだ。選手資格のほかにプロ大会を開催すれば協会や役員が体協にとどまれない恐れがあった。

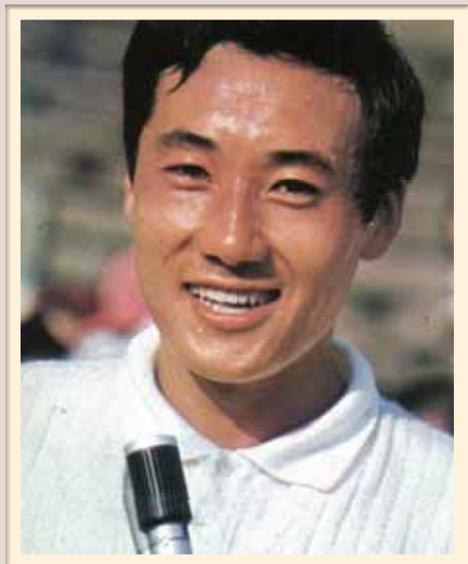
だが、アマチュア厳守は結果的に世界的な孤立と相対的な弱

体化に結びつく。ようやく70年代に入り、ツアー空白区のアジアでオープン大会開催の機運が芽生えた。72年、日本、香港、フィリピンでアジアサーキットが組織された。日本は新聞社が外国人選手を招待して開いていた「朝日招待」を発展的に解消する大会として「ジャパン・オープン」を創設。ただ、賞金総額1万5千ドルと小規模で有力外国選手は不在。アマチュアの坂井利郎が九鬼潤を下し、第1回チャンピオンとなった。

日本体協が「やむをえない」と日本協会によるオープン大会開催を認めたのは73年。ジャパン・オープンはこの年から「グランプリ」シリーズの公式大会に仲間入りした。10月に大阪、続いて東京で2大会開かれた。男子の賞金総額は8万5千ドル（大阪2万5千、東京6万）。「大阪オープン」の名称の大阪は、決勝でケン・ローズウォール（豪州）が坂井を6-2、6-4で下し、「ジャパン・オープン」の東京もローズウォールが決勝で全米オープンに優勝したばかりのジョン・ニューカム（豪州）を6-1、6-4と圧倒した。女子はリーグ戦で争う非公式大会で、イボンヌ・グーラゴング（豪州）が1位となった。

日本初のオープン大会開催の栄誉を担った大阪だが、会場の制約が多いことから開催は1回だけで終わった。今では歴史のかなたに埋もれ、ATP（プロ選手協会）ツアーのメディアガイドブックでもローズウォールの優勝にカウントされていない。ジャパン・オープンは東京・田園コロシアムを主会場に続く。

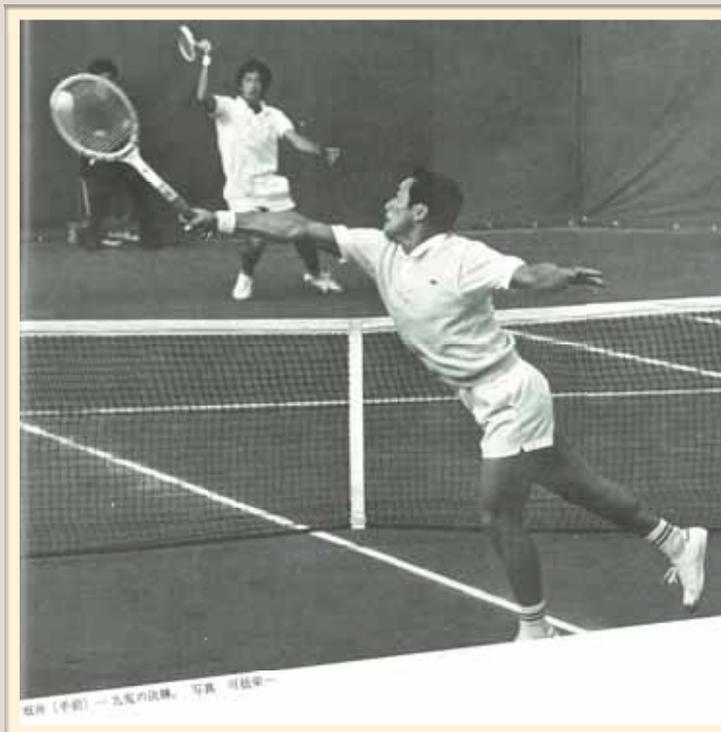
女子がツアーの公式大会に認定されたのは79年。ここに男女がそろった「ナショナル・オープン」としてのステータスが整えら



第1回優勝者坂井利郎

第1回決勝 坂井対九鬼

2点とも、モダンテニスNo.18 撮影：川廷栄一



坂井（中前）—九鬼の決勝。写真：川廷栄一



2005年日本人初のダブルス優勝 岩渕聡・鈴木貴男

撮影：松本昭夫

れた。

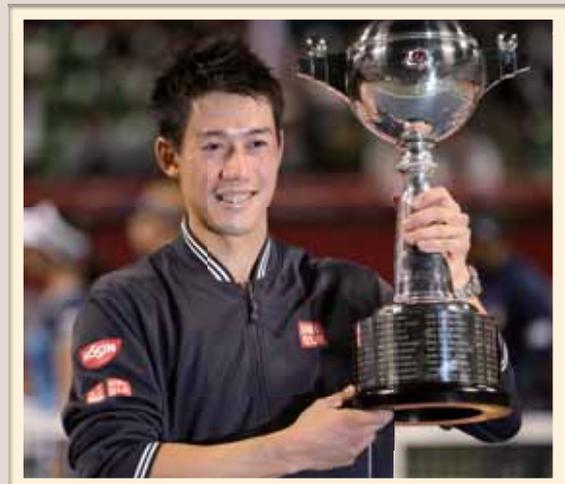
ローズウォール、ニューカム、ラウル・ラミレス（メキシコ）、マニエル・オランテス（スペイン）、ロスコ・タナー（米国）、80年にはイワン・レンドル（チェコスロバキア）と世界のトップクラスや有望選手がチャンピオンロールに並ぶ。女子は地味な選手が多いが、85年にはガブリエラ・サバチーニ（アルゼンチン）がツアー初優勝を飾った。

だが、最初はメインスポンサーが付かなかった。フレッド・ペリーのヒットユニオンが付くのは76年から。それも82年にはまたなくなり、役員は手弁当状態で大会を支えた。会場は83年に新設の有明テニスの森公園に移る。だが、スポンサー難から賞金総額はツアーでも中位にとどまり、世界トップの参加は難しかった。この頃、東京で引き続いてセイコー・スーパー大会が開かれ、中堅どころのジャパン・オープンにまるで「前座」的存在となった。

この立場を一変したのが、1万人収容の有明コロシウム完成と、サントリーのメインスポンサー化だ。賞金総額は一気に65万ドルに引き上げられる。背景にはWCTアトランタ大会の購入があった。開催時期も10月からアトランタ大会の時期だった4月に移る。豊富な「資金」を背景に、リニューアルした88年から男子シングルス優勝者は、同年ジョン・マッケンロー（米国）、89年から3連覇のステファン・エドベリ（スウェーデン）、92、95年のジム・クーリア（米国）、93年からの4年間に3度制したピート・サンpras（米国）、準優勝もエドベリに2度敗れたレンドル、マイケル・チャン（米国＝94年）、アンドレ・アガシ（米国＝95年）と世界ナンバーワンや四大大会優勝者がきら星のごとく並ぶ。名実ともにアジアを代表するトーナメントだった。

だが、景気後退に伴う冠スポンサー難に再び直面した。4月の開催時期は、米国の春のハードコートシーズンが終わり、5月の全仏オープンへ向けた欧州クレーコートシーズンに踏み出す時期で、有力選手の参加に苦戦するようになっていた。そこで再び10月開催に戻り、トップ選手の参加もかなう。2006年には初参加のロジャー・フェデラー（スイス）がティム・ヘンマン（英国）に完勝し、07年はダビド・フェレール（スペイン）、翌年トマシュ・ベルディハ（チェコ）、09年ジョーウィルフリード・ツォンガ（フランス）、そして10年にはラファエル・ナダル（スペイン）がチャンピオンに名前を連ねた。翌11年はアンディ・マリー（英国）がナダルに逆転勝ちする。

そして遂に12年、錦織圭がミロシュ・ラオニッチ（カナダ）を7-6、3-6、6-0で下し、日本男子選手初制覇を達成した。錦織は14年も全米オープン準優勝の勢いをもち込み、連戦の疲



錦織圭 写真提供：テニスクラシック・ブレーク

労の中で再びラオニッチを7-6、4-6、6-4で退けて2度目の優勝を果たした。

アジアを代表する大会として世界の流れ、景気動向に左右されながら、遂にここにたどり着いた。ナショナル・オープンに自国選手が優勝することは、選手はもちろん、大会を支えてきた関係者にとってもこれほどの喜びはないだろう。

ただ女子は09年からツアーから外れて下部大会になり、11年以降は開かれなくなったのは残念だ。03年、16歳だったマリア・シャラポワ（ロシア）は東京でのツアー初優勝をきっかけに翌年のウィンブルドン制覇まで羽ばたいていった。

最後に日本勢の足跡を記す。男子シングルスは78年に九鬼、79年に神和住純がベスト8になり、拡大した88年には準々決勝で松岡修造がマッケンローと2セットともタイブレークの大接戦の末敗れた。コート将球足が速かった06年は世界ランキング1078位の鈴木貴男が準々決勝でフェデラーに6-4、5-7、6-7と大善戦、フェデラーを「ナンバーワンが1000位台の選手に負けるのかと一瞬思った」と冷や汗をかかせた。ダブルスではその前年、鈴木・岩渕聡組が日本ペアとしてツアー初優勝を遂げた。

女子は公式大会となって以降の日本選手初優勝を、83年に井上悦子が飾る。89年は岡本久美子が制し、90年代は日本勢が毎年のように決勝に進んだ。92年から伊達公子が3連覇、95年の準優勝を挟んで96年も優勝。有明の球足は伊達のライジングショットにマッチし、ジャパン・オープンではないが、96年のフェドカップで世界の女王シュテフィ・グラフ（ドイツ）を破る殊勲を挙げた舞台でもあった。96年に伊達が引退を表明すると、翌97年から杉山愛が2連覇し、99年は準優勝である。女子は、男子に比べて賞金額が少なく、トップ選手が来なかった側面があるにしろ、ジャパン・オープンは日本女子にとって世界へのスプリングボードになっていたのである。



杉山愛

ミュージアム収蔵写真より